編集後記

◆春のお祭りなど、威勢のよい作品があった。将来の不確かな時代にあって、親は子の健康を切に願い、獅子に頭を噛まれるように押し出すが、小さな子は泣いてしまう。その対比をとらえた面白さ。見ている作者にも納得できない気持ちが残ったようだ。それにしても熊である。春になっても熊の出没は続いている。山に帰らない熊に、里では年中気をつけなければならないようだ。

三人で順番に回す「ごきげんいかが?」のメンバーが代わりました。新野祐子さんは短歌に挑戦です。

◆親を送ったあとに「終活」というのか、自分の最期を考える人が多いのではないだろうか。お骨を拾うとき、名古屋など中部地方では喉仏だけと聞いて驚いた。その流れで読んだ本に、火葬のあと収骨しないという選択肢もあると書いてあった。それならさっぱりして、いいんじゃない? と思った。本を紹介する。

・源淳子『「遺骨を拾わない・お墓をつくらない」葬送を考える』(同時代社、二〇二四年)

・源淳子『自分らしい終末や葬儀の生前準備』(あけび書房、二〇一七年)

源淳子さんは、仏教研究者、女性問題研究者。島根県の浄土真宗本願寺派の寺に生まれ、のちに仏教をジェンダーの視点で考えるようになり、親鸞思想をよりどころとして生きてきたという。難しい本ではありません。源さん自身の例をもとに、やさしく解説。お墓や戒名に疑問をもっている人は読んでみてください。

(布宮慈子)

muninokai.com

113 号より上記サイトのオンライン版発行のみとなっています。

季刊 展景 122 号
二〇二六年七月三十日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形県西村山郡河北町谷地庚 79
info@muninokai.com

Copyright © 2026 MUNINOKAI. All rights reserved.